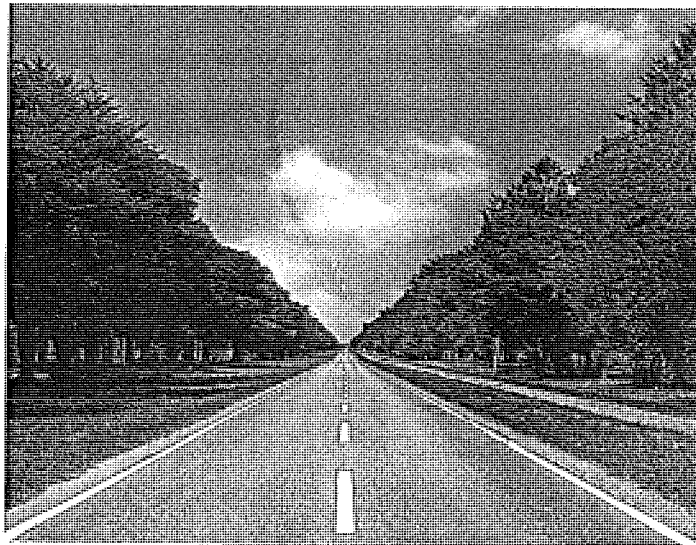


シンポジウム



●テーマ●

遥かなる道・ロータリー

流れる 生きる 思いやる

基調講演

ガバナー
古庄五生

本年2月、米国アナハイムにおける国際協議会に、私たち夫婦は全国34地区ガバナーノミニーの一員として出席するため、緊張の中で旅立ちました。8日間に及ぶみっちりしたスケジュールを完全にこなすことが、7月1日からガバナーになるための絶対越えねばならぬハードルだったのです。

開会式の冒頭、時のR.I.会長エレクト、ハーバート・ブラウンさんは、会長テーマを荘重な雰囲気の中でお述べになりました。

その時私は、言い知れぬ親しさを覚えたのです。と申しますのは、本題に入る前に「ロータリーというものは、輝くばかりの水滴が崖を伝い、岩を伝い、細い糸のような流れとなって、それが小川となり、そして幾百幾千の小川が大河に注いで悠々と流れる、これがロータリーの姿である」とおっしゃったのです。

私は、昨年地区大会の実行委員会から大会テーマを決めてくれと言われた時、「遥かなる道・ロータリー」「流れる、生きる、思いやる」というテーマをつくり、これを胸に刻んでいました。R.I.会長エレクトさんのおっしゃることとあまり違いがなければ、これに決定しようと心に決めて渡米したのです。

この冒頭の言葉を聞いた時、私は自分の考えていたこのリズム「遥かなる道・ロータリー」「流れる、生きる、思いやる」……これを多治見の地区大会のテーマとしようと決心したのです。

私は、ノミニー就任以来約2年間、常に「真心と笑顔」を説いて参りました。そして、ハーバート・ブラウンさんこそ、真心を大切にされる、すばらしい笑顔の持ち主であるということその時発見したのです。

さて、ただいまからシンポジウムに入るわけですが、こういうシンポジウムはこの地区大会でも行われます。しかし、2630地区の今年に限って、非常に大変な幸運に恵まれたということを申し上げねばなりません。

まず一つは、R.I.会長代理として板橋敏雄様ご夫

妻をお迎えできたということです。当地区における中北ガバナーと同期のガバナーとして活躍され、以後、R.I.の枢要な地位につかれ、全世界のロータリアンをご指導下さっているお方です。

しかも、私どもと今日お見えの同僚の3人のガバナーの、アナハイムにおける研修会のリーダーであったのです。

18セクションにわたる研修の課程で、日本のリーダーは3人いらっしゃいました。東京の紫野リーダー、佐世保の富永リーダー、そして今日R.I.会長代理としてお迎えした板橋リーダーだったのです。

10日間にわたる滞米中、私たちは幸いにもこの3人のリーダーの方たちと、歓迎昼食会、晩餐会、あるいはお別れ会等何度かお食事も共にし、既に師弟の関係が結ばれておりました。ハーバート・ブラウン会長さんの粋な計らいに感謝いたしました。

さて、二つ目の幸運は、私が最も尊敬し教えを受けている渡辺孝パストガバナーに、兎にも角にもコーディネーターをお引き受け願えたという幸運です。

しかもパネリストとして、渡辺孝先生がそ

の広い交友関係の中から“流れる、生きる、思いやる”の三つの部門について最もふさわしい先生方をお選びになり、そのまた3人の先生方が、「渡辺孝先生の言うことなら仕方がない」とお忙しい中、今日こうやってお越し下さったのです。

日本古代史、伝統文化を語るならば、日本の第一人者であられる 所 功先生は、昭和から平成に名が代わった時、その年号問題、皇室の歴史、国の文化等、テレビに出ずっぱりで解説をなさっておられました。ご記憶のことと思います。

悠々と続く日本の歴史、日本人の文化と心の「流れる」様を、私たちにお教え下さるのではないかと思います。

小瀬洋喜先生は、ご承知のごとく2630地区が全国のロータリアンに誇ることでできる私たちの仲間です。

大垣ロータリークラブ公式訪問のアセンブリーです。自然保護、あるいは環境問題の大御所を前にしての、ガバナーたる私のしどろもどろぶりをご想像下さい。小瀬先生には、人間のみが主張する利便さの追求と、環境保全の「生かされる」道の接点をいずこに求めたいのか、これを模索していただきたいと思います。

吉田豊先生は、教育、芸術の世界における重鎮です。子供のいじめ、しつけ、あるいはサリン問題、経済の不安等々、厳しい現状を通しての人間らしい「思いやり」の心を語っていただきたいと思います。

また吉田先生は大変多趣味でして、そのご活躍の一端で

ある演劇、古典の面白さ等もちろりとお漏らし下さい。

戦後半世紀が経ちました。50年前、農村は疲弊の極に達し、都会は廃墟とべんべん草の山でした。工場、港、交通機関はその機能の大半を失い、子供には教科書もノートも鉛筆もありませんでした。数百万の復員兵と引揚者を、領土の狭くなった日本に迎え入れ、一椀の雑炊に、長い長い行列を作った記憶をお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。その時、「リンゴの歌」が瞬く間に全国に広がりました。たった一つの歌が、若者たちの夢を呼び、希望を持たせ、日本人に勇気を与えたのです。日本の心の再出発は、まさにリンゴの歌だったと申せましょう。

現代はどうでしょうか。絵はがきでしか見たことのないハイウェイや、高いビルがたくさん出現する時代となりました。道は車で溢れ、店は品物でいっぱいです。半日で地球の裏側に立てる便利さ、分秒を争って駆けめぐる情報、人間の子供と遊ばずテレビの画面と遊ぶ子供たち。

その結果、麻薬とピストル犯罪の日常化、あるいはサリンに代表される精神欠陥狂信者たち。子供のいじめと自殺。出世第一、親の言いなりの受験戦争。そして学校は出たけど就職難。川岸にも浜辺にも山にも、ひたひたと押し寄せる鉄とコンクリート群。

暮らしの苦しい時や貧しい時に夢が持て、贅沢を極めた今になって心の荒廃を呼ぶ。この不思議は一体どこからくるのでしょうか。誰が、何に手をつけたらいいのでしょうか。解決の糸口をどこに見出したらいいのでしょうか。日本の将来は大丈夫なのでしょうか。三先生に極めて素朴にして単純な質問を投げかけることをお許し下さい。

所先生にお伺いいたします。歴史の「流れ」

を知るということが、このような問題点を捉えるのに、どういう役割を果たしているのでしょうか。歴史をひもとき理解することが、将来の展望につながると言われる、その由縁をお教え下さいませんか。

小瀬先生にお尋ねします。空や緑や川や海の汚れを、もうここで踏みとどまり、小さな動物たち、草や花や木と共に「生きる」には、いかなる方策があるのでしょうか。

そして吉田先生にお伺いいたします。人間、特に日本の将来を担う青少年に、日本古来の麗しき「思いやり」「譲り合い」等々の心を回復させることは、目下の急務だと思います。世界に伍して行けるよう、世界の孤児にならないよう、幅広い視野と思いやりの心を融和させる妙手はないのでしょうか。

三先生方、どうかご自由に、気心の赴くまま、あとは帆任せ、風任せ、もう一つ言うならば、コーディネーターの渡辺先生任せで心の中を語って下さい。決してロータリーの枠にとらわれないように、「遥かなる道・ロータリー」という題を「遥かなる道・人の道」と置き換えていただいて結構です。

私は今、人の出会いの不思議さ、人のつながりの面白さ、あるいは人の心を揺り動かしてくれる人々の有難さに心が震えています。このシンポジウムの成り立った意味と、その底に脈々と波打つ“流れる、生きる、思いやる”の心に触れさせていただくことにより、私はその責めを果たしたいと思います。結論を出していただくとは思いません。港に辿り着かなくても結構です。大海に漂ったままで十分です。あとは会員が考え、行動を起こしてくれるでしょう。だからこそ『遥かなる道』なのです。

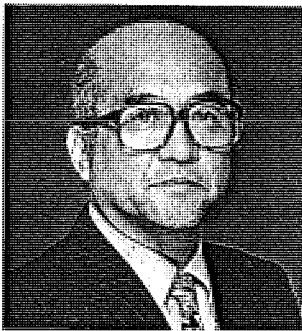


プロフィール



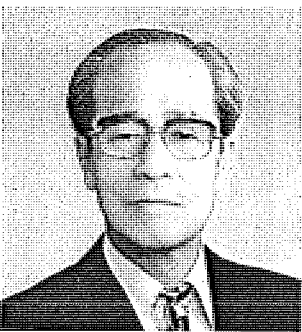
コーディネーター
渡辺 孝
(バスターガバナー・岐阜南R.C.)

岐阜県教育委員・国際養蜂学会会員
大正10年9月17日生
昭和22年 神戸経済大学経済学部卒 (現神戸大学)
渡辺養蜂場長
著書：カント「実践理性批判」(訳書) 「近代養蜂」
「ミツバチの文化史」 「美濃路燃ゆ」
★ミツバチ研究で国際的に活躍。文学面でも「飛鳥の百済びと」などの古代三部作で県芸術文化奨励賞を受く。



シンポジスト
小瀬 洋喜
(大垣R.C.)

大垣女子短期大学学長
大正15年4月13日生
昭和28年 岐阜薬科大学卒
医学博士・薬T学修士
中央公害対策審議会専門委員
現代歌人協会会員
著書：「水と公害」 「薬事公衆衛生学」
「円空・啄木・現代短歌」
★水質汚濁問題の第一人者
短歌界でも一家を成し、社会派短歌に新生面をひろく。



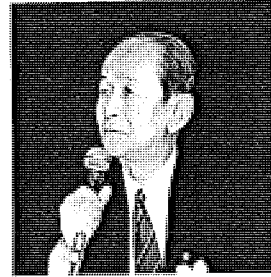
シンポジスト
吉田 豊

中部女子短期大学教授
大正15年4月21日生
昭和23年 東京高等師範学校文科二部卒
昭和59年~ 平成元年 岐阜県教育長
岐阜県芸術文化会議会長
岐阜済美学院参与
★高い教育理想を掲げて岐阜県教育界を指導
古典文学、古典芸能にも造詣の深い文化人
元 県美術館長



シンポジスト
所 功

京都産業大学教授
昭和16年12月12日生
昭和41年 名古屋大学文学部卒
修士・法学博士
昭和50~56年 文部省教科書調査官
著書：「三善清行」 「伊勢の神宮」
「日本の年号」 「三代御記逸文集成」
★年号研究の最高権威
昭和天皇崩御から御大葬まで、NHKに長時間出演したことは有名



コーディネーター
渡辺 孝
(バスターガバナー・岐阜南R.C.)

実にすばらしい基調講演だったと思います。こちらで聞いていまして、古庄ガバナーの非常に高い理想と熱い情熱がじかに伝わってきました。私もすっかり感動してしまいました。ありがとうございました。

ただいまの講演にありましたように、「流れる、生きる、思いやる」は、「過去、現在、未来」と言い換えてもいいんじゃないかと思います。

「流れる」は歴史でありましょう。我々日本人の祖先はどんなに立派であったか、そしてこの2000年の間に、我々はそれを受け継ぐことができたか、あるいは失われたものが多かったのではないかと、というような反省です。

2番目は、特に環境破壊の問題ですが、果たして現代の我々は自然と共生できるかどうかです。日本人というのは、この2000年の間、大自然の懐に抱かれて非常に賢明な生活をしてきたはずですが、それを我々は取り戻すことができるかどうかです。

そして3番目に「思いやる」。21世紀を担う若い人たちの教育は、果たしてこのままでいいのかどうか。21世紀というのは、いろんな人がいろんなことをおっしゃっています。高度情報化社会ということで、非常にバラ色に描く方もありますし、いや、そうじゃないん

だ、爆発的な人口増加で人類は飢餓に陥るんじゃないかという、極めてペシミスティックな見方もあります。一つだけはっきりしているのは、やはりお互い思いやりの心で生きなければ、21世紀は恐らく暗い世紀になるのではないかということだと思います。

そういう意味で、この三つは、非常に大事なテーマであると思います。「流れる、生きる、思いやる」そしてその延長上に「遥かなる道・ロータリー」があるんだろうと思うわけです。

そこで三先生にただいまからご発言をいただきたいのですが、ガバナーのお言葉にもありましたように、結論を必ずしも出さなくても必要はないわけですし、大いに脱線も結構です。そして、必ずしもロータリーにこだわっていただく必要もないわけです。「遥かなる道・人の道」でも結構ですので、ぜひ率直なご意見を賜り、むしろこの満堂のロータリアンの心胆を寒からしめるような、そういう問題提起も大変結構ではないかと思います。

それでは最初に所先生、お願いいたします。



シンポジスト
所 功

この要覧の紹介にもありますが、私はまったくの若輩でして、トップバッターを務めさ

せていただくことに大変恐縮しております。しかし、若い者が露払いをやれということだと思いますので、最初に発言させていただきます。

いま渡辺先生がおっしゃったように、「流れる」というキーワードの部分は、歴史に関することだと思います。私は学生時代から歴史が好きで、今日まで平安時代の法制文化を中心に研究を続けておりますが、そういう観点から思う所を申し上げます。

先般「流れる」というテーマを渡辺先生からお聞きして、すぐ思い浮かべたのが、ご承知のギリシャの哲人ヘラクレイトスが言った「万物は流転す」という言葉です。

これはどういう意味を持つのか。いろいろ解釈がありますが、私どもが普通に理解しているのは、それまで物事を固定的、あるいは絶対的に考えていた人々が、この言葉によって、物事は流動的であり、しかも相対的なものだということに気がついた。それ故に、現在にこだわってはいけない、過去からの流れと未来への流れを見通して、その中でどのように生きていくかということを考える。そういう知恵を与えられたのではないかと思います。

これは何も二千数百年前のギリシャの哲人だけではなくて、我々の祖先の切なる思いでもありました。

鴨長明という人が、今から800年くらい前に京都の神主の家に生まれ育ち、後に出家して「方丈記」という有名な随筆を書きました。

その冒頭に「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく止まる

ことなし」という言葉があります。我々の祖先たちも、人生というものは、あるいは世の中というものは、まさに川の流れのようなものだ、ということを感じ、諦観していたように思われます。

しかも、そのようなことは、特別のインテリとか一部の人々だけが考えていたのではなくて、多くの方々も、生活の経験の中から感じ取っていたのだらうと思います。

たとえば、皆さんもよくご承知の「いろは歌」というのは、空海が作ったという説もありますが、誰が作ったかわからない無名の庶民が自然に作りあげた歌だと言ってもいいと思います。

「色は匂へど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ、うゑの奥山けふ越えて、浅き夢見しゑひもせず」—。これは、文字を覚える一つの方法なんです。そこに「諸行無常」ということが端的に読み込まれています。それを覚えた、人々は、すべて世の中に永久とか絶対とかいうことがありえないのならば、目先だけにとらわれることなく、長い目で人生を考え、そしてひたすら生き、かつまた、あの世にも思いを託してきたように思われます。

そういう意味で「流れる」という言葉は、大変すばらしいキーワードだと思います。ただ、「流れる」というのは、常に順調に流れるばかりでなく、流れが止まってしまう、流れが枯れてしまう、ということもよくあることです。そういう意味で、我々人間は、単に流れを傍観しているのではなくて、その流れを作り、また変えながら、過去から現在へ引き継ぎ、現在から未来へ受け継いでいく、という積極的な営みをそこに加える必要もあります。同様に、

歴史というものは、固定的、絶対的なものじゃなく、流動的、相対的なものだと思えば、その流れる歴史というものを、どのように受け止め、どのように作り変え、そして受け継いできたのか、ということを考えてみたいと思います。

私は、歴史なくして現在なく、現在なくして未来はないという、あたり前のことを実感しております。歴史というのは、過去の記憶であり、記録でありますから、その記録に基づいて分析し評価し、それを活用していくのだと思います。皆さんは、今朝起きてから今までのことを記憶しておられるから、今ここにいるということがわかっているわけですね。もし、不幸にして記憶喪失の方がおられるとしたら、何処から来たかわからない。ということは、何処にいるのかもわからない、何処へ行ったらいいかわからない、ということにもなります。我々が今何処にいるか、これから何処へ行くか、ということの的確に判断し行動できるのは、過去に対する記憶をしっかりとっており、それを活かしているからだろうと思います。

そういう意味で、日本の歴史は、特に日本の文化はどのような流れを辿ってきたのか、ということ振り返ってみたいと存じます。もちろん、それ一口で申し上げるのは難しいのですが、かつて平泉澄という東大の国史の先生が「日本精神発展の段階」という論文を書かれています。

これによれば、まず、古代=大和時代には、自然が大変大事にされた。ついで上代=飛鳥・奈良・平安時代には、芸術が非常に重んぜられた。そして中世=鎌倉から吉野・室町



時代には、仏教が大変貴ばれ、庶民の世界にまで行き渡った。近世=安土桃山から江戸時代には、儒教が人々の生活の根底を支えてきた。さらに明治以降の近現代に入ると、我々は科学というものを最も重視し、それによって利便を得てきた。と、このように各時代の文化価値を基準にして特徴を示されました。

端的に言うならば、こういう各時代の文化価値といえますか、文化的特徴というのは移り変わって来ています。しかし、それでは古代における自然を尊重し、あるいは信仰すら寄せるという思いが、その後なくなったのかといえば、古代人ほどではないにせよ、現代に至るまで伝わっています。後ほど小瀬先生からお話があるかもしれませんが、自然に対する強い思いというのは、おそらく古代の人々が持っていた感性をもう一度見直す所から、いろいろ学び取ることがあるかと思えます。あるいは上代の芸術にせよ中世の仏教にせよ近世の儒教にせよ、我々はそれを研究したり信仰したりするというほどでないにしても、やはり生活感覚の中に、それらを受け継いで来ています。

つまり、各時代の文化価値というものは、

その時代だけでなく、その次の時代まで流れて、それがいくつかの流れとなって合流して、大きな川となって今日に伝わっています。それを私どもはしっかりと受け止めなければならないのだらうと思います。

もう一つ紹介しますと、この平泉博士のお弟子さんにあたる坂本太郎という先生に、『日本歴史の特性』という書物（講談社学術文庫）がございます。私は直接の教え子ではありませんが、たまたまこの本を作るお手伝いをしましたので、特別に思い出深い本なんです。その中で先生は、日本の歴史の特性として、三つの特徴を挙げられました。ひとつは連綿性、ひとつは躍進性、もうひとつは中和性です。

たとえば、日本の歴史の、文化の連綿性、あるいは伝統性を端的に表わすのは、皇室であろうと思います。日本の皇室はいつ始まったのか、わからないくらい古くから続いています。少なくとも千数百年、ひよつとしたら2千年を越すかもしれません。そういう家筋が今なお続いている、これはある意味で世界の驚異であります。

また、神社やお寺には、大変古い文化、あるいは本来の文化が今に伝わっています。私は大学を卒業して10年ほど伊勢の皇学館大学に勤めましたが、その時（昭和48年）に前回の式年遷宮がありました。また一昨年（平成5年）には、第61回の式年遷宮がありました。20年に一度、原形に忠実な復元を繰り返す制度が1300年も続くというようなことが、現に日本では行われているわけです。

さらに、一昨日終わった「正倉院展」は、今年が戦後50回目の展覧会ということで、私も出

掛けたのですが、今から千二百数十年前のものがそのまま伝わっている。これは一たん滅びて地下に埋もれ発掘されたような遺物ではありません。ちゃんと東大寺の正倉院に、天皇の許可がなければ開けない勅封という形で、今に伝えられたものです。その中に大宝元年（701年）の美濃の戸籍もあります。今から1300年近い前の戸籍が、断片であれ原物のまま残っているのです。

ところが、日本では古い文化が連綿と続くだけでなく、新しい要素も積極的に取り入れて文化が躍動し、新しい時代へ向けて革新を重ねて来ました。「大化の改新」とか「明治維新」というのは、政治的な改革と同時に文化の革新でもありました。それによって、古くから続いている文化に新しい要素が取り入れられ、しかも両方がバラバラに存在するのではなくて、うまく中和され折衷されて、今日に至っています。

たとえば、古来の神道と外来の仏教は、早くから融合して、神仏習合というような思想や実態が見られます。それどころか、神儒仏基習合とっていいようなことが、私たちの冠婚葬祭等々にも見られるわけです。このようなことから、あるものを絶対視して他のものを排除するのではなくて、それぞれの長所を生かし、合わせて受け継ぎ、未来へつないで行こう、という先人の思いが可能にして来たのであらうと思います。

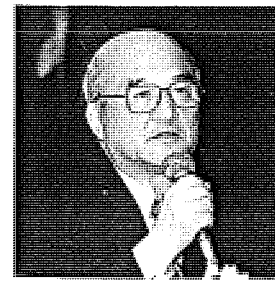
とりあえず、こういうふうな流れのもとに今日の日本がある、という事実の指摘のみにとどめさせていただきます。

過去の歴史の中にこそ、未来に向かってどうあるべきかという教訓が含まれてい

る、というご論旨だったと思います。

お話を承っていて、思い出したことがあります。これはもう30年以上前でしたが、あるR.I.の会長が、その年のテーマを“レビュー&レニュー（Review & Renew）”という言葉で表現されました。“レビュー”は過去を反省する、再検討するということですね。それから“レニュー”は新しくすることです。これをあるガバナーが、「温故知新」と訳されました。これはなかなかうまい訳だなあと感心したんですが、古きをたずねて新しきを知る、所先生のただいまのお話は、まさに「温故知新」「レビュー&レニュー」だったと思います。

それでは次に小瀬先生、「生きる」の方をよろしくお願いします。



シンポジスト
小瀬 洋喜
(大垣R.C.)

渡辺先生に言われれば断れないだらうというお話をいただきましたが、私は、昭和44年でしたか、岐阜南ロータリークラブに入れていただきました。その時、渡辺先生が会長でした。

私自身その頃、公害問題に揉まれていたのですが、当時、ロータリークラブで公害問題をやるなどとてもできる時代ではありませんでした。それを渡辺先生が会長として「小瀬

さん、ロータリーで公害をやらなきやだめだ。君、やれよ。俺がやらせるから」といういきさつで取り組みを始めたのが、鮮明に思い出されます。

今日も、古庄ガバナーのお言葉の中に、R.I.会長の「ロータリーは山崖を伝って落ちる輝くばかりの水滴が、やがて細流になり、小川になり、何千何百という小川が大河に流れ込んで合流してくる」というお話がありましたが、あの時代に公害問題に取り組むというのは、まさにこのひとつの水滴だったという思いがします。

世の中では、非常に公害問題への関心度が高かったのですが、経営者の多いこのロータリーの中で、公害問題をやるのはどうなのかと思い、「渡辺さん、いいんですか」とたずねたのですが、「いや、これからこれが大事なんだ」と言われたのです。25年も昔のことですが、今こうやってロータリーがみんな、環境問題に取り組んでいるのです。

テーマの中に、「遥かなる道」というのがあります。この遥かなる道というのは、顧みて「遥かなる道」、これからを見据えての「遥かなる道」の二つがあると思います。環境問題も、実はわずか30年間のようですが、顧みるとうずいぶん遥かなる道そのものでありました。

日本の国の経済発展が非常に盛んになってきた。その中で、とにかく物を造るということだけをやってきた時代の中で出てきた公害問題。その頃にも公害対策基本法があつたのですが、この時代に考えていたことは、経済との調和ということでした。環境を大事にしなければならぬ。だけどそれは経済との調和のもとである。この考え方のもとで、たく

さんの公害病と呼ばれる病を発生することになってしまいました。

そんな時代に、たくさんの公害問題の対策を岐阜南ロータリークラブを中心にして行いながら、県下、あるいはこの地域のロータリアンの方々が格別にご協力下さり、進めていただいたので、岐阜県では筵旗1本立ったことはありませんでした。全国あちらこちらでは、公害問題で筵旗が立ちましたが、岐阜県では企業や企業の組合のトップにいるロータリアンの方々が中心になって対策をすすめるロータリーによる公害防止活動をやっていたのです。いろんな公害問題を持つてはいましたが、この地域では川が大変きれいになってくるといふ具体的な形で成果が上り、筵旗が立たないで済んでしまったのです。

あの時代の経済との調和という考え方がその後、人間の健康保持、そして、生活環境の保全を考えなければならぬというふうになりました。先程のお話で言いますと、文化価値が変わってくるということですが、私は、文化をもとにしながら環境の価値が歴史の中で変わってくるのを、この30年の間に体験したと思います。その後、私自身も、環境のいろんな研究をしたり、行政に関わったり、運動に関わったりしながら、岐阜県下の水が非常にきれいになったのを見て、「ああ、僕の学問はもう必要がなくなった。これで終わるのかなあ」という思いさえしたこともありました。

たまたまその頃、薬科大学から女子短大に移り、短大生に講義をしました。講義をしてみると、薬大の学生とはまるで違って化学がわからないのです。化学がわからない学生にどうやって話をしようかと苦労しながら、ハ

ツと気がつきました。

世の中の多くの人は、化学式も反応式もわからない人達である。その人達にどうやって環境を守るかということ、これを身につけてもらい、実現し、実行してもらうのでなければ、環境は守れないんじゃないかということです。これは私にとって大きな発見でした。

やがて世の中がそんなふう動いていくうちに、工場によるところの、企業体によるところの公害ということから、環境を汚染しているのは実は自分たちではないか、市民じゃないか。自分たちが汚しているという意識を持ちながら、これをどう解決していつたらいかということが求められる時代になってきました。

もうひとつ私にはその頃の思い出があります。「リオ宣言」という地球環境サミットの宣言が出て、そのころから、「地球環境」ということが言われるようになりました。

これは、私にとって「僕はそんな大きな仕事はできない。この川の、この山の、この町のことはできるけれど、宇宙の、地球のことはできない」という思いで、「もう僕の学問は役に立たない」と再び思いました。

しかし、そのことも誤りであることに気づくことになりました。実は、私たちの周辺のことには目をやりながら、それを守ることが、地球環境を守ることだということ、すなわち、いまの女子短大生たち、あるいは市民の方々に環境問題に取り組んでいただくことを呼びかけ、その方法を見つけ、それを実現することを進めていくことが、地球環境を守ることになるんだということがわかって来たからです。

所先生のお話を伺いながら、平泉先生がおっしゃっていた文化価値が歴史と共に変わっていく、私はこの短い間に、文化的な価値や環境に対する人間の考え方が、こんなにも変わってきたことを思いながら、まさに、これこそ「流れる」だろうという思いがするわけです。

環境問題が企業による公害問題から、市民による環境汚染に変わってきた今、一番大きな問題は何かということ、大量生産し、大量消費し、大量廃棄してきたことによって、ゴミに埋もれているという実情であります。

私は、県の産業廃棄物の処理に関する協会、岐阜県環境保全協会の理事長もしておりますが、岐阜県では、間もなく産業廃棄物を埋める場所がなくなってしまうことは、岐阜県の産業が止まってしまうことであります。

なぜそんなことになってしまったのか。たくさんの物をどんどん作り、廃棄物を出し埋めてきたのですが、みんなもう私たちの所に埋めるのはいやだと言いつ出したのです。今も、ある場所で処理場の建設をしながら、「そんな所が私たちの所に来るのはいやだ」という大きな運動もあります。

三重県でもきつと今に埋める場所がなくなってしまうだろうと思います。そして私たちは、ゴミの中に埋まらなければならなくなってくるのです。これは、私たちがこれからどう生きていくかということの道を作ることだと思えます。

私は経済学者ではありませんが、自分の専門から出て話すようにというご依頼がありましたので、その道を出て、どうして行ったらいいのか次の時間にお話します。

渡辺 ありがとうございます。

大変ショッキングな問題提起でございます。非常に謙遜してお話になりましたけれど、日本は数十年前まで公害後進国だったのですが、今、公害防止については、恐らく先進国にランクされていると思います。

これはやはり小瀬先生のような方のご努力の賜物でございます。あの頃は、本当に企業を悪玉にしておれば事は済んだのですが、企業が公害防止を技術的にどんどん推進した結果、現在はむしろ一般の市民が被害者であり加害者である、そういう状態だということをおっしゃったんだと思います。ありがとうございました。

それでは、吉田先生お願いいたします。



シンポジスト
吉田 豊

「思いやり」という言葉を辞書で引きますと、「やさしい心から出る心、行為」と書いてあります。しかし私はいま日本中の皆さんが「思いやり」とか「やさしさ」という言葉を大変誤解し、間違っって使っておられるんじゃないか、という気持ちを持っております。今日私がお話させていただくのは、この一点でございます。

またある辞書を引きますと、「思いやり」や「やさしさ」は、「Sympathy」と書いてあります。あるいは「Put oneself in a person's place.他の人の場所に自分の心を置く」と書いてあるものもあります。

別の辞書には「Friendship」と書いてあります。人間は元々血縁関係の者がある集団を作っていた。ところが、だんだん血縁関係ではなくて、言葉が違う、皮膚の色が違う、考えが違う、こういう者たちが集まって集団を作るようになった。そこで近代社会の形態として、必要に迫られて「Friendship」が出てきたということでしょうか。

志賀直哉の最も有名な小説に、「小僧の神様」というのがあります。貧しい小僧が寿司が食べられないので紳士が一つ与えるという、それだけの話であります。

しかし、今の時代において、日本人の考え方は、ただ単に相手に同情するという見方しかありません。それは、この作品に現れているような我々日本人が貧しい国にお金さえ与えれば、それが思いやりの心を持っている、やさしい心を持っているということと混同しているのではないのでしょうか。

日本人がもしも貧しい国を前にして何かをすするとするならば、ただ単にお金を与えるだけでなく、彼らと共に生きる、日本人と、日本という国と、それらの貧しい国とが共に生きる、そういう気構えがなければ本当の「思いやり」とは言えないのではないのでしょうか。

ですから「小僧の神様」に現れる紳士は、誠にはかない日本のインテリの姿である、こんなふうに批評する方が多く現れてきたわけ

折しも、今年は戦後50年であります。この50年の年に、ここでこのような会が開かれることは、非常に意義あることだと思います。私たちはこの50年の間に多くのものを失ってきたと思います。その一つですが、私たちはよく「個性教育」という言葉を使います。でも、個性とは一体何なんだ。ひよつとしたらエゴイズムと同じ意味に取っていないだろうか。こういうことを思うことがございます。

一つの例を挙げると、今年の7月に参議院の選挙がございました。その時の投票率は、全国平均でわずか44.5%でした。つまり100人のうち、約55人がそっぽを向いていた、ということでございます。

ところが私は、その翌日、もしくは翌々日のマスコミの論調を見て大変意外に思いました。ほとんどの論調は、選挙をされる政党なり政治家に問題がある。だからこのように棄権率が高かったという書き方でした。私は違うと思います。それと同じ分量で、棄権をした人を責めるべきではないかと思うのです。

日本国の憲法には、権利について約30程、義務については三つ書かれてあります。しかし、その権利の中に選挙権という項目はありませんが、義務の項目にはこれは含まれておりません。義務の項目に入っていないものを私たちはやる必要がないのでしょうか、そこに問題があるのだと思うのです。

私はある政治学者に、外国では憲法に選挙は権利だけ謳っていて、義務は謳っていないかどうかということを知りました。ほとんどの国は日本と同じ権利が謳ってあるだけで、義務は謳っていないということでした。

では投票率はどうなのかと聞きますと、イ

ギリスが圧倒的に高く、日本は投票率が極めて低い国だと言いました。これは一体どういふことなのでしょう。

たとえば、イギリスやアメリカでは自分達が血を流しながら民主主義を勝ち取った。ですから自分達の国をいろいろと考えてくれる人、つまり政治家を自分たちの手で選ぶんだという意識が、非常に強くなっていると思います。

日本にはそれがありません。与えられたものですからのうのうとしていて、100人中55人の者がそっぽを向いているんだと思わざるを得ません。

私は先程、「個性教育」という言葉が叫ばれている中で、その「個性」というのはエゴイズムと同じではないかと申しました。先程のご挨拶の中に、「菊の香薫る」というような言葉がございました。今、日本中はいたるところに立派な菊が花開いております。菊は桜と並んで日本の国花でございます。

ところで菊といえば50年以上前にアメリカで、ベネディクトという女の方が「菊と刀」という題で、日本人の精神構造を分析した書物を発表しました。名著だと言われており、戦後私もずいぶん読んだものでございます。

50年以上前でございますから、日本がアメリカと戦争をしている頃でございますが、彼女は其中で、「いま、日本人は多くの束縛を受けている。封建的な束縛を受けている。これは日本の国を花に例えれば、菊の花に針金があるのと同じである。しかし、新しい時代が来て針金を取り去られても、きっと日本の菊の花はきれいに咲くであろう」と言っております。

菊を見ると、必ず針金がピシッとつかい棒にしてあります。私は戦後50年の今、振り返ってみて、この針金がなくなってしまったのではないかと思うのです。

しかし、美しい花を咲かせるには、やはり一定の時まで針金が必要なのではないのです。では、その針金とは一体何なのでしょう。

アメリカのケネディ大統領が就任の演説で言った一部分に、「国民諸君、諸君は今諸君の国家が諸君に対して何をしてくれるかを問うべき時ではない。諸君が国家に対して何をなすべきかを問わねばならない時なのだ」という一節がありました。

私は、日本人を考える時に、誰かが、国が、何かしてくれるのではなくて、自分たちは今何をすべきなのかを考えることが大切だと思います。

「やさしさ」とか「思いやり」というのは、実は、自分という個が充実していて、その個が中心になって国が充実していき、そして初めて出てくる感情であると思うわけでございます。

ところが残念ながら投票率の低下に見ることく、私たちには個の充実、己に対する厳しさというものが失われつつあると思います。

では今後どうしたらいいのか。後ほどお話しさせていただきます。

ありがとうございました。

個性教育はエゴイズム教育におちいりやすい。これも非常にショッキングなご発言だと思います。教育現場で長らくご苦労なされて、しかも最後には岐阜県の教育長という最高の

指導的な地位にあられた、吉田先生ならではのお言葉だと思います。

ただいまのお言葉、本当に義務を忘れて権利だけを主張する、そういう今の若者に対する頂門の一針だろうと思います。

ありがとうございました。

一通り三先生からご意見のご発表がございましたが、それでは第2ラウンドといたしまして、ほかの先生のご発言も踏まえて、第1回目のご発言の補足的なお言葉を賜れば幸いです。

それでは所先生からお願いいたします。

お二人の先生から、いろいろなことを学ばせていただきありがとうございました。先程お話を少し補足させていただきます。

最後の方で申し上げたことですが、日本人のライフスタイルを見ますと、ある意味で大変おらかなのだと感じます。例えば、冠婚葬祭もそうですし、衣食住を見ましても、いろいろなものをいいとこ取りで寄せ集めて、上手に使いこなしています。これを裏返して言えば、一つのものに徹底していないとか、曖昧だとかいうことで、どこかのノーベル賞受賞作家は、「あいまいな日本」の在り方を厳しく批判していますが、私はむしろ、それをもう一度評価し直してみたいと思います。

イギリス出身でオーストラリア国籍のグレゴリー・クラークという人に、『ユニークな日本人』という書物（講談社現代新書）があります。その中で、日本人は西洋の人々とも違うし、また、東洋の中国や韓国やインドなどの人たちともずいぶん違う、ということ指

摘しております。

手短かに申しますと、日本人は、人類がこの地球上で生活し始めて以来の基本的な生活のありようというものを、20世紀の今日まで持ち伝えている。とりわけ、家族的な人間関係社会・調和社会というものを今もなお維持し続けている、とっております。

それに対して、日本以外の所では、実はなかなかそうはいかなくて、自分以外を信じられず、いわば敵とすら見てしまい、それとの共存を図るために契約という方法を考え出した。それをクラークさんは、「個人的な契約関係を中心とする対決社会」といっておられます。つまり日本以外の所では、生きる知恵として個人が自立し、そして他者との対決を契約でしながら共生してきた、というわけがあります。

しからば、どちらが住みいいか。先般京都でクラークさんにお会いした時に聞きましたら、「そりゃあ日本の方が気楽だ」と言うんですね。奥さんに対して、いつも愛している証として「I love you」を言わなきゃいけないというのでは、しんどくてかなわない。やはり「俺のことはわかっているだろう」「わかっていますわよ」というふうな、お互いに信じ合える関係というのを、もし本当に持ち得るのであればそれほど幸せなことではない。そういう意味で、自分は日本を離れようとは思わない、というようなことをいつておられました。

さて、それじゃなぜ日本でそのようなことが可能になったのでしょうか。一つは、地理的に日本列島という島国では、どこへも逃れようがありませんから、同じ日本人同士であればまた、外国から来られた方でも日本に住

まわれている限り、みんな家族を拡大したような仲間である、と考えるようになった。誰もお互いを信じてしまう、信じるからこそ気楽に生きていけるわけです。

例を挙げてみますと、中世頃から盛んになった「七福神信仰」というのがあります。面白いことに、七福神というのは、恵比寿様を除きますと、インドの神様とか中国のお坊さんなどを寄せ集めて、それが仲良くと宝舟に乗っているんですね。

船に乗る、つまり運命共同体であります。日本列島という運命共同体に定住し、そこで生活していかなければならないとなりますと、お互いのことを考えて生きていくほかない。それは何も人間だけではありません。周囲の自然もすべて含めて、限りある資源の中で共生していくことを考えるうちに、日本的な特徴を作り出したのではないかと思います。

しかし、これは別に日本だけのことではありません。今や、広く地球規模・宇宙規模でものを考えなければなりません。誰かの言った「宇宙船地球号」の中で、本当に共生していくためには、かつて日本人が培ってきたような生き方、やはりお互いを人間として信じ合い、また自然とともに生きていくという在り方を、地球全体に取り戻す必要があるのではないかと思います。

もう一つは、私ども日本人がお互いを信じ合い、かなりおおらかに物を考えられるのは、やはり前世を信じ、また来世を信じているからではないかという気がいたします。

「袖すり合うも他生の縁」という言葉があります。タシヨウというのは、他の生と書いたり、多い生と書いたりしますが、要するに、

人間は、今生、この世だけでなく、前世からの因縁があり、来世にもつながる生命があつて、何度も生まれ出ることが出来る。しかも、人間だけでなく、動物も植物も含む同じ生き物として、互いに何度も生まれ変わるといような思いを、どこかに持ち続けてまいりました。

このような考え方は、これは広い意味で日本人の宗教観と言つていいでしょうか。そうした思いがあるからこそ、やはり自分を絶対視しない、相手を敵対視しないで、社会的な調和を保つようなこともできたのではないかと思います。

これは、古来の神道的な考え方なのか、あるいは中国から入ってきた儒教的な考え方なのか、さらにはインドから伝わってきた仏教的な考え方なのか、それともキリスト教やヨーロッパの思想の影響なのか、よくわかりませんが、私たちは、そういうことを理論的ではなく、実際的に考えて参りました。

たとえば、私どもの日常会話でよく口をついて出る言葉に、「お互い様」とか「お陰様」というのがであります。これが意味するところは実に深い。「お互い様」というのは、人間、お互いに至らぬ者同士だから、共に手を携えて頑張っていきましょう、という気持ちが根底にあるからだと思います。また「お陰様」というのは、何か成就できた時、それが誰のお陰かわからない。大自然のお陰かも知れず、また親のお陰かも知れないが、何事であれ、決して自分一人では為しうるわけではないという謙虚な思いが、この言葉に込められているのだと思うのです。

そういう意味で、「お陰様」とか「お互い様」

という言葉が自然に使ってきた日本人の在り方は、クラークさんの言う日本にのみ残ったユニークな生き方としてだけではなく、むしろこれから21世紀どころか、ずっと先まで生かされていい知恵ではないか、という気がいたします。

こういう素朴ながらも偉大な知恵を、私どもは過去の先輩達から、受け継いで参りました。これをもう一度見直して、将来に繋いでいくということが、今最も大切なことの一つではないかと存じます。

清見 ありがとうございます。

日本人の過去の生き方、特に心の持ち方、その中に将来に対するひとつの教えがある。

大変いいお言葉だったと思います。

それでは小瀬先生、お願いいたします。

小瀬 所先生は、日本は島国であり一つの運命共同体だとおっしゃいました。

環境問題を考える時、最近、江戸時代を見直そうという見方があります。何かと言いますと、江戸時代はまさに鎖国であり閉鎖社会でありました。その中で物を動かしながら美しい日本の環境を作り、生活を築いてきたのです。いろいろな物を上手にリサイクルしたため、資源のない日本の国でも豊かに過ごすことができたのです。その時代の考え方が、今、大事ではないかということです。

リオの地球サミットで非常にすばらしい提言が出されました。それは、「持続可能な開発をする」ということです。今度の新しいわが国の環境基本法の中でも、環境に対する負荷

が少なく、持続可能な開発を進めようとしています。

今まで私たちは、物を大量生産し、大量消費し、大量破壊をするという形で、環境に大きな負荷を与える開発を行い、発展をしてきたのであります。しかし、これからの時代では、そうした負荷を少なくしながら物を作らなければなりません。これが地球規模で見た現在のコンセンサスです。

日本で果たしてそれができるのでしょうか。バブル崩壊後、経済体制は非常に混乱し、その中でいろんな道を探りながら、また再び昔のように大量生産、大量消費の経済体制をどう作ったらいいかを尋ねているのではないかと。多分ご出席の皆さんも、それを一生懸命考えていらっしゃるだろうと思います。しかし、地球的コンセンサスはそうではない方向にあります。

この間、ドイツで「循環経済法」というすばらしい法律ができました。日本もそうですが、今まで廃棄物処理という形で出した廃棄物を、一般廃棄物・産業廃棄物として処理してきました。ドイツでは、新しく作った物は作った責任において、後の廃棄のことをちゃんと考えなさい。物を作ったら、もうこれがゴミになることを考え、それがどうなるかを考えなさいという採り方をしたのです。ヨーロッパ連合でも、その後、この考え方を採っております。関係者の方々は、10年後にはアメリカでもその法律を採り入れるだろうと考えております。

つまり、これから物を作る時に大事なことは、環境に対してどんな考え方をしているかということ、それが消費者に受け入れられるかどうか

かなのです。しかるべき方々の調査によりますと、アメリカにおいて最も発展している企業は、環境に対する負荷を十分に考えながら、「わが社の製品はこういう形で環境に対することをしています」と言える企業であります。また、それをアピールすることによって業績を伸ばしているのです。

かつて渡辺先生のもとで、私たちが公害を出さないようにしようと言った時、大変冷ややかな目で見られ、まさに一粒の露の思いがしたのであります。私は今日、思いきってそんなことを申し上げてみたいと思います。

これからの時代には、環境の中での負荷がない形で、わが社の製品をどう作っていくかということを考えることだと思います。

私もロータリーに入れていただき、何度も何度も職業奉仕のことで議論し、学び、また語つてもきました。あの時代によく言われたことは、いい品物を安く供給することが職業奉仕だということでした。でも今になってみますと、いい物を安く与えるだけで、果たして企業人としての責任が持てるかと思うのです。これからの時代に大事なことは、いい物を安く作るだけでなく、環境に対する負荷のないような物を作る。そうした社会的な良心が必要になってくるだろうと思います。

最近出ている考え方を紹介します。今までの非常に重要な分野に、新しいデザインで作るということがありました。モデルチェンジし、あるいは新しい物を作り、それによってまた買ってもらおうということをしてきました。

しかし、現在の世界の潮流の中にいますと、デザインこそが環境破壊のもとであると言えます。私はこの時計を随分長い間使っております。

しかし、別の時計を買わせようとして、魅力のあるデザインのもので出てきます。でも、時計であることに変わりがなく機能でも素材でも変わりはない。「でもデザインが違うから、また買ってよ」と呼びかけるのです。

ここにいらつしやる皆さんも、わが社の製品を売るためにはどんなデザインにしたらいいかを、一生懸命考える方が多いと思います。でも、今までとどう違うか。機能は変わらない、素材も変わらない、デザインが変わるだけだということでしたら、そのために物を作って、今までのものが廃棄されるという形になってくるのです。

そうした経済システムではない形の中から、いい物を作り、そして長く使っていただき、それによって企業的な利益を受けることができなんでしょうか。私は経済学者ではありませんが、しかるべき方々の計算によれば、そうした形によって出てくる利潤は、かなり多く掴むことができるということでもあります。

企業の経営者としての皆さん方が、そのようにデザインを変えるだけで新しい商品を作り、廃棄物を作り、ゴミを作り、環境への負荷を作ってきたような経済体制、わが社の生産体制。それが本当の社会奉仕なのか、それが本当の職業奉仕なのかと思うのです。

そうした負荷を与えず作ることが、本当は環境に対して大事なことではないかと思うのです。そんな考え方が今出ていることをご紹介いたします。

ありがとうございます。

実は小瀬先生は、歌人、歌詠みで、短歌もお詠みになります。歌人としては本当に有数

SYMPOSIUM

の方で、大新聞の歌壇の選者もおやりになっておられます。その先生の歌集を私いつも頂戴しています。

2〜3年前でしたか、一番新しい歌集を頂戴して感動しましたのは、非常に苦しみながら、今の公害問題等と取り組んでいらつしゃることでした。

恐らく学者としての良心と社会的ないろいろな圧力との板ばさみだろうと思うのですが、それにも拘らず、絶対に信念を曲げず、ここまでいらつしゃったわけです。ですから、ただいまのご発言は、非常に重みのあるご発言ですので、ぜひ会場の皆様方も十分噛み締めていただきたいと思います。

それでは最後に吉田先生、お願いいたします。

吉田 私はロータリアンではございません。でも、二つのことについてロータリークラブの皆さんにお願いしたいと思います。

一つは、今から30年ほど前の昭和39〜40年頃でございますが、その頃は人口爆発の時代と言われました。15〜16歳の少年が非常に多くなり、高等学校を随分増設した時代がございます。そんな頃、文部省や中教審が中心になり、これら爆発的に増えた少年の将来のために、「期待される人間像」はどうあるべきかということ、学識経験者を集めて検討し、発表いたしました。

期待される人間像の「期待される……」という部分は、流行語にもなったことのある言葉です。ところが今の私達は、その時に作り上げられた「期待される人間像」を知っているのか、そういうものの存在を知っているの

か。ほとんどの方は、「そう言えば、そういうものがあつたなあ」という程度のことしか思い出されないでしょう。

それは一体どうなつたのか。また、なぜ国民運動とならなかつたのか。お読みになつた方もあると思いますが、このことは少年の将来のことを考えた、誠にすばらしいものでありました。しかし、国民運動になることなく、消えていったのは一体なぜかと思うわけでございます。

私は一つの例として、選挙で棄権をする人が非常に多い。そして棄権する人をむしろ許容するような社会の状態ではないかということ、これを申し上げました。それでは、棄権をしないために、棄権をした者に対しては強い罰則を決め、罰則によって罰すればいい、という考えが出てきます。

法は、根底的に人間の性は悪なるものであるということが前提であると思います。ですから、法によって何かをさせるということについては、問題があると思います。しかし、これこれをやらねばならないということ、どうやってやらせたらいいのか。

私がものの考え方の基本にしているのは、ヘーゲルという哲学者の「弁証法」でございます。「一つの考えがあるとすると、必ずそれに対応する相反する考えがある。この両者、つまり正と反の立場を止揚して、ある一つの高揚した考え方が生み出されるものである」。私はこんなふうに、ヘーゲルの「弁証法」を読んでいるわけでございます。

その考え方を基にして先程の話について言えば、どうしてもやらねばならないことがあつても、それを法によってコントロールする

ことはどうなんだろう。今こそ私はロータリークラブに属される皆さん方の思想・哲学が問われる時代であろうと思います。

ロータリークラブが中心になって、国民的運動にどうしたらいいのかという哲学を、私は見せていただきたいと思うのです。先程からのいろいろなご挨拶やご講演の中で、私はその一端を知ることができました。しかし、それを一つの国民的運動にまで高めたもの、これを私は期待したいのです。

たとえば、週1回お集まりになる。いくら多忙でもお集まりになる。あるいは2週に1回お集まりになるというそのエネルギーを、私はそういうことにも向けていただけたらありがたいと思います。

今、日本の若者の問題点は、大きく言えば一つです。リーダーたる者、それは親でも、学校の先生でも、政治家でも、誰でもいいと思いますが、リーダーが、リーダーとしての力を発揮していないということです。従って、非常に若者が空洞化しているのです。

そういう時に、悪い意味のものも含めて、ここに一つの世界があるぞという強い指導力を持った者が現れると、ついそちらへ行きたくなるものであります。

湯川秀樹博士が、「宇宙を研究すればする程、人間ではいかんともできないものがある。超人間的な、それは神と名づけてもいいが、そういうものの存在を認めざるを得ない」とおっしゃつたのですが、若者たちは単純に、ここに完璧なものがある、ここに新しい世界があるぞという具体的に示される強い言葉について惹かれがちになってしまうのです。

そういう時に、「そうじゃないんだ。本物は

これなんだ」ということをお示しいただくのが、私はロータリークラブの皆さん方の責務ではないかと思ひます。失礼なことを言っていると思ひますが、お許し下さい。

二つ目です。先程、渡辺先生が、私が古典芸能に関心があるという主旨のことをおっしゃいましたので、少し触れさせていただきます。

日本の伝統的な演劇は、歴史的に見ると「能」が起源でございます。そしてそれが「文楽」になり、そして今繁栄している「歌舞伎」になっています。この「能」「文楽」「歌舞伎」という三つのものは、日本の伝統的な演劇であるということは何れでもお認めになります。

ところが従来、この三つの演劇は、残念ながら外国人には理解されなかつたのであります。わずかに市川猿之助という人が現れて、早変わりをする。そうしたことによって外人の目を楽しませ、拍手を得ていたのです。

しかし、そうではないんだ。もつと日本の本物を外国人の人達に見てもらおうじゃないかということで、去年の夏、「俊寛」という題材をもとに、「能」と「文楽」と「歌舞伎」の代表者が、ヨーロッパ公演に回りました。

ところが「俊寛」という悲劇が、「能」でも「文楽」でも「歌舞伎」でもヨーロッパの人々に受け入れられたのです。ということは一体どういうことなのか。よくスポーツに国境はない、音楽に国境はない、と言ひますが、私は言語がある演劇でも国境はないと思うのです。

私が今申し上げたいのは、これからの将来であります。私は先程、ロータリークラブの方が中心になって、国民的運動にして頂きたい、今の若者はかくあるべきなんだというも

のを提示していただきたい、哲学として表していただきたいと申しました。

小瀬先生のお話の中に「宇宙的」という言葉がしばしば出てきました。環境問題の時には、「宇宙的」とか「グローバル」という言葉を使うのに、なぜ若者の指導の時には「宇宙的」とか「全世界」という言葉を使わないのでしょうか。

宇宙を、21世紀を支えるのは日本の青少年だけでなく、世界中の若者であります。でしたら、世界中のロータリアンが、世界中の青少年はかく進むべきだというようなことを示すべきではないでしょうか。

今朝いただいた資料の中に、昨日の新聞が入っておりました。その記事の中に、古庄ガバナーがある記者のインタビューに答えて、「今後ロータリーは心のある共生を考える」ということをおっしゃっています。

この共生という言葉、共に生きるという言葉は、一体どの範囲のものなのか。私は、若者の教育ということも、学校が悪いんだ、いや親が悪いんだ、社会が悪いんだというキャッチボールではなくて、今こそ日本の有識者が、そのエネルギーを持って、「俺たちがやるんだ」と言っていただきたいのです。

いうならば守りから攻めへ、あるいは洗練されたものから、雑然としていてもいいからエネルギー的なものへ、これで、私たちが引っ張って行っていただきたいのです。今の日本の青少年は、あるいは世界中の青少年はそれを待っているかも知れません。こんなふうに思っているのです。

私は重ねて申し上げます。ロータリアンではございませんので、ひよっとしたらそうい

うことは自分たちはすでにやっているよ、ということがあるかも知れませんが、こういう席をお借りしてお願いする次第でございます。

渡辺 ありがとうございます。

「ロータリアンよ、若者たちの指導者になれ」というご提言で、全くその通りでございます。

R.I.においても、「青少年に対する奉仕は Investment for future …未来に対する投資だ」と提言し、交換学生やインターアクト、ローターアクトなど、青少年に対する奉仕は従来から行われておりますが、これを機会にますます活発に活動していかなければなりません。

吉田先生ありがとうございました。

三先生のお話を2回ずつ承りましたが、いかがございましたか。三先生とも非常に静かにお話しになりましたが、どんな大演説よりもはるかに充実した、そして我々の肺腑をえぐるようなご発言だったと思います。

特に痛感しましたのは、三先生ともご専門は違いますけれど、それぞれ非常に視野が広くていらっしゃる。そして、非常に長い目で日本やご自分の将来をご覧になっておられるということです。

本当にそれぞれ重みのあるお言葉ばかりでございました。こういうシンポジウムというのは大抵きれいな事で終わるのですが、今日はきれいな事どころか、いろいろな点でショックを受けました。皆さん方も同感だろうと思います。

どうも三先生、ありがとうございました。

「日本文化の流れ」 参考メモ

京都産業大学日本文化研究所 所 功

①Herakleitos “Panta rhei” (All things are in a state of flux.)

鴨 長明『方丈記』 「行く川の流れは絶えずして…」

②平泉 澄博士「日本精神発展の段階」(史学雑誌)

(a) 古代(大和時代: ほぼ1c~6c末)
……………自然(純)

(b) 上代(飛鳥・奈良・平安: 7c~12c後)
……………芸術(美)

(c) 中世(鎌倉・吉野・室町: 12c末~16c中)
……………仏教(聖)

(d) 近世(安土桃山・江戸: 16c後~19c中)
……………儒教(善)

(e) 現代(明治・大正・昭和: 19c後~20c末)
……………科学(真)

③坂本太郎博士「日本歴史の特性」(講談社学術文庫)

(イ) 連綿性(伝統性)
……………(ex) 皇統世襲・社寺伝世品

(ロ) 躍進性(革新性)
……………(ex) 隋唐文化・南蛮文化・欧米文化

(ハ) 中和性(折衷性)
……………(ex) 神仏習合・和漢様式衣食住

4日本人の冠婚葬祭(牧田 茂「人生の歴史」など)

…(ex) 婚儀 妻問婚→嫁取婚(邸内→神前→式場)

…(ex) 葬儀 埋葬式→火葬式(仏式~儒式~神式)